

國學院大學學術情報リポジトリ

中国青海省西寧市周辺農村における漢民族の喪服習俗

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-05-21 キーワード (Ja): 青海省の漢民族, 葬礼, 喪服, 孝, 社会関係 キーワード (En): 作成者: 李, 生智, Li, Shengzhi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000397

中国青海省西寧市周辺農村に おける漢民族の喪服習俗

李生智

1. 問題の所在

清時代（1644-1912年）の雷鍾（1740年～不明）は、『古経服緯』の「開宗明義」において「地位の尊卑、親族の内外、血縁の濃淡を区別することにおいて服制より詳細なものはない」と、服制の意義について述べている⁽¹⁾。中国における重要な服制のひとつとして喪服があり、その形式は死者と当人との人間関係を明示するのはいうまでもない。

儒教の經典である『礼記』と『儀礼』の内容に基づき、古代の中国は葬礼に着用される喪服のことを、斬衰、齊衰、大功、小功、緦麻の五つに分類し、これを「五服」と呼ぶ。「五服」は、布地の精粗、裁縫の様式、着用期間の長短などに厳密な規定があり、こうした喪服の差異によって「五等服制」という親族関係が明示される。さらに「五服」では、死者の親族に対する服喪期間、役割分担、着用期間の禁忌（生活規範と禁忌）などを定め、どのような衣装を着用しているかで死者との関係の濃淡（親等）を表わしている。

こうした「五服」についての研究は、『中国古代喪服の基礎的研究』〔谷田1970〕、『東洋法制史研究』〔広池1983〕、『中国喪服制度史』〔丁2000〕などがあり、「五服」の服制に関する文献から、この制度による社会秩序の構築、法律の制定⁽²⁾への影響、喪服の制度史について言及されている。しかし、これらの研究は文献に依拠して中国の喪服制度を述べるに留まり、多様な地域社会の実情、喪服制度が一般民衆の葬礼にどのように受容されているかといった漢民族の葬礼における実態は捉えられていない。

たとえば、石奕龍『中国民俗通誌・喪葬誌』では、「明清時代になると、綿布の普及により、喪服を制作する材料も麻布から麻混み布や綿布などが使われるようになった」〔石2005 179頁〕と指摘している。明清時代に青海省へ移住したとされる漢民族の間では⁽³⁾、後述のように麻布と綿布の両方を喪服に用いており、実際に喪服の素材が変化した様子がみられる。こうした変遷について、同書では

「古典には漢民族の間で統一された「五服制度」が存在している一方、実際には各地の喪服は異なる。喪服は喪家の経済力や地域的な解釈、そして時代影響などにより、各地で多種多様な特徴を持っている」⁽⁴⁾と述べている。現在も中国における喪服は、従来の「五服制度」に基づく規定・原則に沿っているが、その伝承実態は地域による特色があり、多様性が認められる。

また以上の論考では、各地域で喪服を着用する目的については十分に論じられていないが、制度で示された意義だけでなく、各地域で伝承される目的があると考えられる。

そこで、本稿では、青海省の省都・西寧市周辺の農村部において、筆者が2016年から2023年現在までに調査した漢民族の葬礼の34事例から、当地域に伝承される喪服の「孝 [xiao]」（調査地では喪服を「孝」と呼び、本稿では「シャオ」と表記する）の実態を把握するとともに、諸様式の比較から当地域におけるシャオの意味を検討する。その上で、調査地の社会秩序や人間関係がどのようにシャオで示されているのかを指摘したい。

2. 葬礼と喪服

青海省の漢民族では、生前から死の準備が進められ、死者は多くの人たちによる葬礼をもって送り出されて墳地に埋葬され、毎年の忌日や年中行事などでは祭祀が執り行われるなどして丁重に弔われる、といった葬送習俗が伝承された。葬礼には、死者の家族、党家（宗族）、親戚（姻戚）、莊員（村人）、職能者（宗教的職能者と技能的職能者）が関与し、死者との関係性によって役割を分担する⁽⁵⁾。こうした関与者の全員がシャオを着用するが、その様式と着用期間が異なる。

葬礼のすべてシャオは、死者が亡くなった後、女性喪主⁽⁶⁾と党家の女性の年配者たちが喪家を訪れて手縫いする。シャオは、粗織の麻布、白と赤の綿布に麻糸、白い綿糸などの材料を組み合わせた「孝帽 [xiào mào]」（帽子）、「孝衣 [xiào yī]」（着物）、腕と腰に巻く「孝布 [xiào bù]」などである。

シャオは幅が140cm位の麻布と綿布をハサミなどの刃物を使わず、手で半分に裂いて縫製する。孝帽の長さは男女、親疎遠近によって異なるが、男性の孝帽に使う布の長さはすべて2.3尺⁽⁷⁾である。死者の近親である女性の孝帽に使う布の長さは7尺、疎遠な女性の孝帽の布は3.5尺である。孝衣は横が140cm、縦が7尺の綿布を用意し、縦半分に折って前面の真ん中を裂いてつくる。着用の際は、裂けた部分を首に掛け、左側の布を上にして交差させて、麻糸を帯として腰に巻く。孝衣には袖を縫い付ける事例もある。また男性喪主は、死者の近親者が喪服の着用の際に必ず持つ「喪棒 [sàng bàng]」を用意する。喪棒は40cm位の竹や木の枝に白い切り紙を貼り付けたものである。さらに、死者の家族・党家及び下位親戚の既婚女性は、自前の「青布衫 [qīng bù shān]」⁽⁸⁾という青い衣裳を着用する。

これらのシャオと持ち物の差異で、死者と着用者との関係性を可視化する。

(1) 家族のシャオ

家族としては、肉親の親子関係において、死者の親（婚入した女性の場合は舅姑）、配偶者、息子や孫など男性の子孫とその配偶者、未婚の娘・孫娘がその範疇に入る。養子や迎えた婿（婿養子）も家族の成員である。これらのうち、養子・婿養子を含めた息子、孫は、死者の子孫として、葬礼で「孝子」または「孝孫」と呼ばれ、息子（養子・婿養子を含む）と長孫は死者の後継者とみなされる。

ここでは、①父母（死者が女性の場合は舅姑）、②配偶者、③後継者、④後継者の妻、⑤長孫以外の孫たち、⑥曾孫、⑦長孫以外の孫と曾孫の妻、⑧未婚の女性子孫（娘・孫娘）の順に家族のシャオについて紹介する。家族は死者の遺体を安置した後にシャオを着用する。この儀礼を「成孝（chéng xiào）」と呼ばれている。死者の死後一年間は、家族全員が祭りや神事、その他の娯楽行事に参加せず、他人宅や寺廟などに訪れることが固く禁じられる。

① 父母（舅姑）のシャオ（図1）

死者の父母（舅姑）のシャオは3.5尺の白い綿布であり、父（舅）は左腕に、母（姑）は右腕にシャオを巻く。シャオは弔問式のみに参加する場合は死者を安置した霊堂の前で焼却する。埋葬まで参加する場合は埋葬後三日目の「全三」の儀礼で、死者の墳前で焼却する。

② 配偶者（妻・夫）のシャオ（図2・3）

【妻】夫が死亡した場合、妻のシャオは孝帽、衣裳（青布衫と孝衣）、持物の三つで構成されている。長髪の場合は、麻紐で髪を頭の後ろに軽く纏める。孝帽は、白い綿布と麻布の二層である。孝帽の一層目は7尺の白い綿布を頭に巻き、その上に7尺の麻布を重ねて巻く。巻いた麻布の正面には、顔全体を隠すほどの大きさの麻布を縫いつける。また、白い糸を麻布に縫い付け、両耳にかかるように綿の玉を垂らす。衣裳、青布衫の上に白綿布で縫製した「孝衣」を着用し、麻紐を腰に巻く。青布衫の襟と布靴に白綿布を縫い付け、「喪棒」を持つ。妻のシャオは後継者とその配偶者と同様に最も重いとされる。死者の妻は死後百日目までシャオを着用し、そのまま焼却する。

【夫】妻が死亡した場合、夫のシャオは孝帽のみである。孝帽は、白い綿布のみで縫製した帽子である。帽子は2.3尺の白綿布を下から上に2cmほど折り上げて縫い付け、白綿布の左右の端を縫い合わせる。そして、帽子の上部の両側を内側に折り込み、先を尖らせた形に整える。夫のシャオは、妻の埋葬後三日目の初墓参りの「全三」の儀礼まで着用し、そのまま焼却する。

③ 後継者のシャオ（図4）

後継者とは死者の息子たちと長孫（最も年長の孫）のことであり、こうした男性の子孫がない場合は婿養子や養子たちを指す。なお、婿や養子を含めた後継者がいない場合は、死者の親甥子（死者の兄弟の息子、死者が女性の場合は夫の

兄弟の息子)が後継者を務める。親甥子の詳細は後述する。

遺体の安置後、後継者は速やかに髭や髪を剃り、坊主頭にする。後継者のシャオは、孝帽、孝衣、持物(喪棒)の三つで構成される。孝帽は麻布と麻糸で縫製し、正面は顔全体が隠れるように麻布を縫い付け、両耳のところに糸で綿玉を垂らす。無地の服に着替え、布靴を履く。この無地の服の襟と布靴には白綿布を縫い付ける。その上に白い綿布で作った孝衣を着用し、麻紐を腰に巻く、手には喪棒を持つ。この後継者のシャオは最も重いとされる。後継者のシャオは「成孝」の儀式で着用し、死後百日の墓参りまで着用し、そのまま焼却する。百日目までの期間、後継者は原則シャオを脱いではいけないとされた。

④ 後継者の妻のシャオ (図2)

後継者の妻は、死者の配偶者、後継者と同じく葬礼での最も重いシャオを着用する。シャオの形式、着用期間は死者の配偶者(妻)と同じである。

⑤ 長孫以外の孫たちのシャオ (図5)

前述のように、長孫は死者の後継者に含まれるため、ここでは除外する。長孫以外の孫(以下、孫)のシャオは三つで構成され、死者の後継者のシャオとは若干異なる。頭髪や髭を剃り、白綿布の孝衣を着用するのは後継者と共通する。ただし、孝帽は麻布ではなく白綿布を素材とし、先端に麻糸が縫い付けるといった差異がある。

孫は百日目までシャオを着用するのが基本だが、埋葬後の「全三」や「五七(死後の三十五日)」に焼却することもある。後継者のシャオは必ず百日目に焼却するのに対し、孫のシャオはそれ以前の忌日に焼却する場合があることから、後継者に比べて軽いといえる。

⑥ 曾孫のシャオ (図6)

曾孫のシャオの形式は、長孫以外の孫とはほぼ同じであるが、孝帽と孝衣は白い綿布ではなく、赤い綿布で作られる。また、孝帽の先端には麻糸ではなく、細長い赤い布切れを縫い付ける。曾孫のシャオは、百日目まで着用するのが基本であるが、埋葬後の「全三」や「五七(死後の三十五日)」の日に焼却することもある。

⑦ 長孫以外の孫や曾孫の妻のシャオ (図2)

長孫以外の孫や曾孫の妻のシャオは、男性死者の妻と同様の形式である。「曾孫の妻のシャオも赤い綿布で縫製する」⁽⁹⁾といい、曾孫世代のシャオには赤い綿布を用いるという特徴がある。着用時期は、いずれも長孫以外の孫や曾孫と同じである。

⑧ 未婚・未成年女性子孫のシャオ (図7)

未婚の娘は私服の上に白い綿布の孝衣を着用し、私服の襟と布靴に白綿布を縫い付ける。布を折って作る花を付けた「輪孝」を頭に被り、手に「喪棒」を持つ。未成年の女性は、輪孝のみを頭に被る。曾孫娘は、花の上側に細長い赤い布切れを縫い付けた輪孝を被る。ここでも曾孫世代を示すものとして赤い綿布を用いる。

これらのシャオは墓参りの際に百日目まで着用するのが基本だが、「全三」や「五七」に焼却することもある。

(2) 党家のシャオ

青海省の漢民族の間に、党家は共通の祖先を持ち血縁関係がある「血縁党家」と親族関係を結盟した村人の「結盟党家」の二つがある⁽¹⁰⁾。党家の関係性は年齢ではなく、祖先となる人を第一世代として何代目かという世代によって区分される。この世代の区分を「輩分 [bèi fēn]」と呼ばれる。親や祖父母や叔父伯母といった上の世代を「長輩」、兄弟や従兄弟といった同じ世代を「同輩」、子・孫や甥姪といった下の世代を「晩輩」の三つに大別される。さらに、婚姻関係や日常生活の付き合いにより、この世代の順番が親戚関係者の間や地域社会にまで延長・拡大し、各人がこれらの社会関係の中でどの世代に位置づけができるのかを確定する。

血縁党家として、①死者の兄弟（死者が女性の場合は夫の兄弟）、②兄弟の妻、③親甥子・甥、④甥の妻、⑤党家の孫世代、血縁関係がない⑥結盟党家の男女のシャオを順に詳報する。

① 兄弟のシャオ（図3）

兄弟は、家を分けることで家族から党家へと関係が変化する。死者の同輩として白い綿布で縫製した孝帽のみを着用する。孝帽は「全三」の儀礼での墓参りまで着用し、焼却する。それまで孝帽は葬礼に関わるときのみ着用し、帰宅時は自宅に入る前に外す。

② 兄弟の妻のシャオ（図8）

図8に示したように、死者の兄弟の配偶者のシャオは衣裳と孝帽の二つである。衣裳は、自宅から着用して来る青布衫である。また、「成孝」の儀礼には7尺の白綿布の孝帽を頭に巻く。シャオは死者の埋葬後の「全三」の儀礼に、死者の墳前で焼却する。死者の兄弟と同様に自宅に入る前に孝帽を外す。

③ 親甥子・甥の孝

青海省では、死者の兄弟の後継者など血縁関係の近い甥を「親甥子 [qīn zhī zǐ]」と呼び、親甥子は後継者とともに様々な儀礼に関与する。後継者が未成年者の場合や後継者が少人数の場合には、親甥子は孫と同様に喪服を着用する（図5）。死者に後継者がいない場合、親甥子は葬礼で後継者の役割を担うことがあり、後継者の喪服を「全三」の儀礼まで着用する（図4）。また青海省では、党家のうち親甥子と同世代の人々を「甥」（日本の従甥）と呼ぶ。「甥」は孫と同じ孝帽を着用し、素朴な私服の襟と布靴に白綿布を縫い付け、喪棒を持つ（図10）。着用期間と禁忌は孫と同じである。

④ 親甥子・甥の妻のシャオ

親甥子の妻のシャオは、夫が後継者の役にあたるか否かに拘わらず、後継者の配偶者と同様のシャオを着用する（図2）。「甥」の配偶者のシャオは、白い綿布

と麻布で縫製した二層の孝帽、青布衫を着用して、腰に麻紐を巻き、襟と布靴に白綿布を縫い付ける (図10) それぞれの着用期間はその夫と同じである。

⑤ 党家の孫世代のシャオ

死者の直系ではない党家の孫世代 (以下、党家の孫世代) のシャオは、先端に麻糸を縫い付けた白い綿布の孝帽を被る。その配偶者は青布衫を着用し、頭に7尺の白綿布の孝を巻く。孝帽正面の先端に麻糸を縫い付ける。党家の孫世代夫婦は「全三」の墓参までシャオを着用する。

⑥ 結盟党家の男女のシャオ

死者と血縁関係がない結盟党家は、葬礼で血縁党家と同様の役割を分担するが、シャオは白い綿布の孝帽のみを着用する (図1)。結盟党家の女性のシャオは、兄弟の配偶者と同じである (図8)。着用期間は血縁党家と同様に「全三」の墓参までである。

(3) 親戚のシャオ

青海省では、女性の婚出と婚入による姻戚関係者を「親戚」と呼び、上位・平等・下位の三つに区分する。上位親戚は嫁いできた女性の実家であり、女性と嫁ぎ先で生まれた子どもの責任者として、その葬礼では「骨主」として「験孝」を行う⁽¹¹⁾。平等親戚は、嫁いだ女性の姉妹が別の家に嫁いで形成された親戚同士を指す。下位親戚は、婚出した女性の実家 (上位親戚) に対して、党家から婚出した女性 (姉妹、娘、孫娘、姪など) の嫁ぎ先との関係を指す。①上位親戚、②平等親戚、③下位親戚のシャオについて、男女別に詳報する。

① 上位親戚のシャオ

葬礼の弔問客は、まず霊前で拝跪礼 (土下座) をし、喪主から配られたシャオを着用するが、上位親戚のみは「験孝」を終えた後にようやくシャオを着用する。上位親戚の男性のシャオは白い綿布で縫製された孝帽のみである (図3)。女性のシャオは7尺の白綿布の孝帽を巻く (図11)。上位親戚は、弔問日のみ、または弔問と全三の儀礼に参加する。弔問日のみ参加する場合は霊前で、全三の儀礼にも参加する場合は死者の墳前で、それぞれシャオを焼却する。

② 平等親戚のシャオ

平等親戚は霊前で拝跪礼した後、喪主からシャオを受け取る。男性は白綿布で縫製した孝帽のみを、女性は7尺の白綿布を孝帽として着用する (図12)。着用期間は上位親戚と同じである。

③ 下位親戚のシャオ

下位親戚は死亡の翌日か弔問日に喪家を訪問する。死亡の翌日に参加する場合は「成孝」の儀礼で、弔問日の場合のみは霊前で拝跪礼した後に、喪主から受け取ったシャオを着用する。姉妹、娘、孫娘、姪などのうち党家から婚出した女性のシャオは、衣裳と孝帽の二つである。衣裳は自宅から着用して来る青布衫で、孝帽は7尺の白い綿布を頭に巻いたものである (図8)。夫である男性のシャオ

は白綿布の孝帽のみである（図3）。

（4）莊員のシャオ

莊員は地縁関係にある村人を指す。莊員は死者との付き合いの如何に拘わらず、可能な限り葬礼に出席する。最も重要な莊員の役割は、遺体を墳地に運び、埋葬することである。

まず、喪主のみは「成孝」の儀礼でシャオを着用する。他の莊員は弔問日に喪家を訪問し、死者の霊前に拝跪礼をした後、喪主からシャオを受け取って着用する（図12）。喪主の男性のシャオは白い綿布の孝帽と7尺の白綿布を腰帶として巻き、他の弔問客の莊員男性は白綿布の孝帽のみを着用する。莊員女性のシャオは3.5尺の白綿布を頭に巻いて孝帽とする。喪主男女は「全三」の儀礼までシャオを着用し、死者の墳前で焼却する。他の莊員は弔問後の帰宅時に霊前で焼却する。

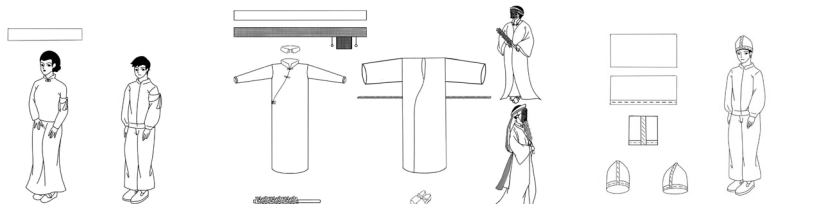


図1 父母（男姑）のシャオ

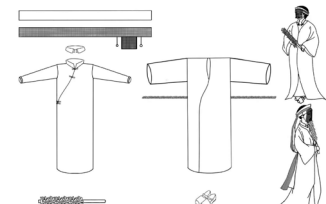


図2 死者妻、後継者・孫・曾孫の妻のシャオ

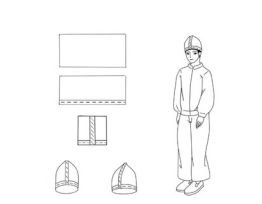


図3 夫、兄弟、男性親戚・莊員のシャオ

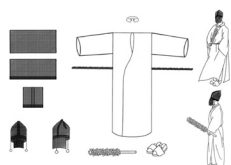


図4 後継者のシャオ

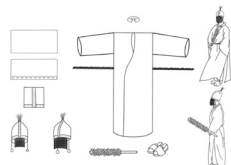


図5 長孫以外の孫のシャオ

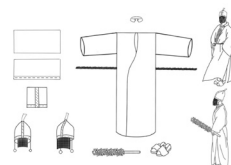


図6 曾孫のシャオ

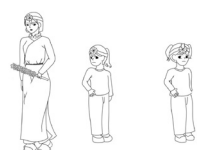


図7 未婚娘・孫娘、未成年孫娘、曾孫娘のシャオ



図8 兄弟の妻・下位親戚（女）のシャオ

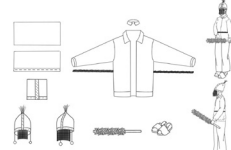


図9 党家の「甥」（従甥）のシャオ

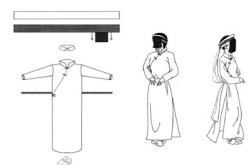


図10 党家の「甥」の妻のシャオ



図11 上位・平等親戚の女性のシャオ

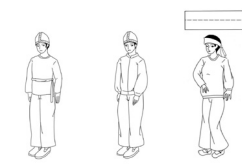


図12 男性喪主と女莊員のシャオ

3. 喪服の様式にみる意味と関係性

前節では、青海省の漢民族の葬礼で着用する喪服（シャオ）について、各人が着用する内容と期間を中心に報告してきた。そこから家族・党家・親族・莊員という所属、性別、輩分（世代順位）といった様々な立場によって多様なシャオの実態が確認された。ここでは、こうしたシャオの伝承実態から、布地と縫製の様式、シャオの着用期間について整理し、シャオの意味やそこにみられる死者との関係性を分析する。

（1）布地や縫製にみるシャオの様式

表 1 は葬礼で着用するシャオの様式を男女別にまとめたものである。

シャオは、基本的に孝帽（帽子）、孝衣（衣裳）、喪棒（持ち物）の三つで構成され、これは前述した通りであるがこれら組み合わせによって親族関係が可視化され、同時に葬礼での立場と役割が表される。組み合わせに基づくシャオの様式には、男性用の 6 種類、女性用の 9 種類、長輩の男女共用の 1 種類がある。これらのシャオの様式を比較しつつ、親族関係によるシャオの着用の内外・親疎の傾向を検討する。

これらのシャオの様式は、孝帽・孝衣・喪棒の三つが基本となるが、孝帽と孝衣については着用する周辺部を含めた体裁が細分化されている。まずは各様式における、①孝帽・孝衣・喪棒の基本構成、②布地と縫製の様式について整理する。

① シャオにおける基本の構成要素（孝帽・孝衣・喪棒）

シャオの基本構成要素である孝帽・孝衣・喪棒のうち、もっとも広範囲で用いられているのは孝帽である。孝帽は大半の関係者が着用するが、党家や親戚、莊員などいずれの所属でも、死者より上の世代にあたる「長輩」だけは孝帽を用いずに白い綿布を腕に巻くのみである。男性の孝衣は、死者の子孫と親甥子が身に付ける。女性の孝衣は死者の配偶者、子孫の配偶者や未成年を除いた子孫という、死者より下の世代の「晩輩」である党家の成員が着用する。喪棒は、孝衣を着用する関係者、死者より下の世代にあたる「晩輩」のうち甥世代の男性とその配偶者が持つ。このようにシャオにおける三つの基本構成要素は、孝帽、喪棒、孝衣という順に使用者が限定的になっていく。

② 布地と縫製の様式

孝帽は、素材、布の巻き方や長さを含めた形状、孝帽へ縫い付ける飾り、といった体裁に差異がみられる。明清時代における綿布の普及を経て、麻布から綿布へと喪服の材料が変化したとされ、現在の葬礼においても孝帽には麻と綿の 2 種類を用いる。

男性の孝帽は帽子の形に縫製されており、息子、長孫、養子などを含めた後継者である男性の子孫のみが麻布、それ以外は綿布を用いる。また孝帽に、綿の吊

表1 シャオの様式と着用者

		頭部					手元	衣裳				死者との関係性	
		髻・髻	孝帽	孝帽への縫い付け			喪棒	腰帶	襟・裾への縫い付け	孝衣	腕		
				吊り玉	顔隠し	先端							
男性	様式1	髻・髻剃り	麻布	綿	麻布	×	○	麻紐	白綿布	白綿布	×	息子、長孫、養子、婿養子、後継者としての親男子	家族
	様式2	髻・髻剃り	白綿布	綿	麻布	麻糸	○	麻紐	白綿布	白綿布	×	長孫以外の孫、親男子	家族
	様式3	髻・髻剃り	白綿布	綿	麻布	◆赤綿布	○	麻紐	白綿布	◆赤綿布	×	曾孫	家族
	様式4	×	白綿布	綿	麻布	麻糸	○	麻紐	白綿布	×	×	党家の甥世代	党家
	様式5	×	白綿布	×	×	麻糸	×	×	×	×	×	党家の孫世代	党家
	様式6	×	白綿布	×	×	×	×	×	×	×	×	死者の夫、党家の兄弟、結盟党家の男性、上位・平等・下位親戚の男性、荘員の男性	家族、党家親戚、荘員
女性	様式1	麻糸で纏髪	麻布と白綿布の2層巻き物（7尺）	綿	麻布	×	○	麻紐	白綿布	白綿布（青布衫）	×	死者の妻、息子の妻、養子の妻、婿養子の妻、孫の妻、親男子の妻	家族・党家
	様式2	麻糸で纏髪	麻布と◆赤綿布の2層巻き物（7尺）	綿	麻布	×	○	麻紐	白綿布	◆赤綿布（青布衫）	×	曾孫の妻	家族
	様式3	麻糸で纏髪	花形付きの白綿布の輪孝	×	×	×	○	麻紐	白綿布	白綿布	×	未婚の娘・孫娘	家族
	様式4	×	花形付きの白綿布の輪孝	×	×	×	×	×	×	×	×	未成年の孫娘	家族
	様式5	麻糸で纏髪	麻布と白綿布の2層巻き物（7尺）	綿	麻布	×	○	麻紐	白綿布	（青布衫）	×	党家の甥世代の妻	党家
	様式6	×	白綿布（7尺）	×	×	麻糸	×	×	×	（青布衫）	×	党家の孫世代の妻	党家
	様式6	×	白綿布（7尺）	×	×	麻布	×	×	×	（青布衫）		党家の孫世代の妻	党家
	様式7	×	白綿布（7尺）	×	×	×	×	×	×	（青布衫）	×	党家の兄弟の妻、結盟党家の女性、下位親戚の女性（婚出した女性）	党家、親戚
	様式8	×	白綿布（7尺）	×	×	×	×	×	×	×	×	上位・平等親戚の女性、女性喪主	親戚
	様式9	×	白綿布（3.5尺）	×	×	×	×	×	×	×	×	荘員の女性	荘員
男女共通		×	×	×	×	×	×	×	×	×	（3.5尺）白綿布	親・舅姑、党家、親戚、荘員などの目上世代（＝上輩）	家族、党家親戚、荘員

り玉や麻布の顔隠し、先端部に麻糸や赤い綿布をつける場合がある。綿の吊り玉と麻布の顔隠しを付けるのは、子孫、党家の甥世代である。孝帽の先端部に麻糸をつけるのは、麻布を用いる後継者を除く子孫と党家の晩輩である。曾孫のシャオの様式で慶事に用いる赤色を含むのは、死者が子孫繁栄を実現させたという功績を讃える意味があり、その配偶者を含めて孝帽と孝衣に赤い綿布を取り入れる。

女性の孝帽は、男性のものと大きく異なり、縫製していない布をそのまま頭に巻いて着用する。綿布はすべての様式で用いるほか、死者と子孫の配偶者、党家の甥世代の配偶者はさらに麻布を重ねる。その他に、未婚の子孫(娘と孫娘など)は花形付の輪孝を用いる、荘員とその他の女性で布の長さが異なるといった違い

がみられる。飾りは、綿の吊り玉や麻布の顔隠しを麻布の孝帽へ縫い付けるのみである。

孝衣はいずれも綿布を素材とし、死者の子孫や親甥子とその配偶者、死者の妻、成人した未婚の娘が着用する。さらに「同輩」以下の党家の既婚女性、下位親戚の女性は、全員、既婚者の礼服用である青布衫を着用する。

また喪棒を持つ人は、麻紐の腰帯を身に着け、襟や靴に白の綿布を縫い付ける。

③ 小括

布地や縫製にみるシャオの様式は、表 2・3 のように着用者ごとに整理され、そこから以下の特徴が指摘できる。

(一)シャオの体裁からは、実親・舅姑、党家、親戚、荘員といった所属に影響をう

表 2 輩分にみるシャオの軽重

		子孫			血縁党家		結盟党家	親戚			荘員	
		(子)	(孫)	(曾孫)	(甥世代)	(孫世代)	—	下位	平等	上位	喪主	ほか
長輩	男性	腕に白綿布のみ										
	女性											
同輩	男性	綿										
	同輩男性の配偶者											
晩輩	男性	重孝	重孝(麻)	重孝(赤)	重孝(麻)	(麻)	綿					
	晩輩男性の配偶者	重孝 ^青	重孝 ^青	重孝 ^青	重孝 ^青	麻 ^青	綿(7尺) ^青	綿(7尺)		綿(3.5尺)		

表 3 党家のシャオ

死者との関係		男性					女性(配偶者)				
		孝帽	孝帽の飾り	喪棒	腰帯/襟靴	孝衣	孝帽	孝帽の飾り	喪棒	腰帯/襟靴	孝衣
長輩		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
同輩	死者の配偶者	綿	×	×	×	×	麻綿	○	○	○	○ ^青
	兄弟世代	綿	×	×	×	×	綿	×	×	×	×
晩輩	子(養子、婿等を含)	麻	○	○	○	○	麻綿	○	○	○	○ ^青
	長孫	麻	○	○	○	○	麻綿	○	○	○	○ ^青
	孫	(麻)	○	○	○	○	麻綿	○	○	○	○ ^青
	曾孫	(綿)	○	○	○	○	麻綿	○	○	○	○ ^青
	親甥子	(麻)	○	○	○	○	麻綿	○	○	○	○ ^青
	党家の甥世代	(麻)	○	○	○	×	麻綿	○	○	○	×
	党家の孫世代	(麻)	×	×	×	×	(麻)	×	×	×	×
	未婚の娘						綿	×	○	○	○
	未成年の娘						綿	×	×	×	×

けない長輩の位置付け、配偶者である女性のみに関係性が影響する同輩、加えて子孫・血縁党家のみ世代が影響する晩輩という「輩分」のあり方が浮かび上がる。長輩はシャオの基本構成要素である孝帽、喪棒、孝衣のいずれも身に付けずに、腕に綿布を巻くのみである。血縁党家の同輩は、基本的に綿の孝帽のみを身に着ける。ただし、死者が男性の場合、その配偶者である妻だけは子孫と同じ様式のシャオを身に着ける。晩輩である子孫と党家のシャオの様式は、長輩と同輩に比して複雑で、直系の子孫と血縁党家、各世代、男女による細かな差異がみられる。

(二)長輩や同輩、親戚、莊員は、白綿布を用いる簡素なシャオである（表1の男性のシャオの様式6、女のシャオの様式6～9）。対して、死者の妻、晩輩である子孫と甥世代のシャオは、孝帽の飾りや腰帯に麻を含む複雑で重い様式であり、「重孝〔zhòng xiào〕】と呼ばれる（表1の男性のシャオの1～4、女のシャオの様式1～3、5）。重孝には、a麻布・綿玉を飾り付けた孝帽、b喪棒と腰帯と襟・靴の綿布、c孝衣という三つの特徴がある。未婚の実娘はa飾り付の孝帽を、党家の甥世代はc孝衣を用いないように、立場によって重孝の組み合わせが異なるが、b喪棒と腰帯等はいずれの立場にも共通する。

(三)こうした差異の意味合いを見ると、a飾り付けた孝帽の着用者は、死者の男性子孫とその配偶者、党家の甥世代とその配偶者である。彼らは共通の祖先を持ち、党家の成員と見なされ、共同で祖先祭祀を担う人である。つまり、a飾り付けた孝帽を着用する人は、葬礼から死者の祭祀を担う人たちである。そのため、未成年や未婚の娘や孫娘などの女性は婚出の可能性があり、祖先祭祀の担当する立場にはないため、その孝帽は白綿布のみで作られる。共通のb喪棒と腰帯は死者の直系の子孫、男性子孫の配偶者、また党家の甥世代とその配偶者が使用する。つまり、死者と同じ党家という社会関係に所属していることを示している。

c孝衣の着用者は死者直系の男性子孫とその配偶者、成年未婚の娘・孫娘である。また、親甥子が死者の後継者の立場にある場合にも孝衣を着用する。つまり、孝衣は死者の直系であり、着用者が死者から血のつながりや財産の相続していることを象徴している。まとめると、a飾り付けた孝帽は葬礼における死者祭祀者としての象徴である、b喪棒と腰帯は死者との同じ所属の象徴である。c孝衣は死者との血縁の継承と財産者を象徴している。

(四)晩輩の中でも長孫と親甥子、党家の甥・孫世代の関係性が注目される。甥世代は重孝、孫世代は簡素なシャオであり、同じ党家の晩輩であっても一世代の差によって両者の様式は大きく異なる。また甥世代の中でも親甥子だけは孫と同様の様式、孫の中でも長孫だけは息子と同様の様式となる。基本的には、党家の成員となる息子を生育することが、死後、祖先になる資格を得る条件の一つである。息子が既に死亡していた場合、男孫が健在であればその孫が息子の役を務める。息子という後継者がいない場合、生前に養子や婿養子をとるか、死後に親甥子が息子の役を務めるか、といったかたちで後継者を確保する。つまり、後継者であ

る息子が欠けた場合には男孫が子の役を務めるという葬礼のかたちがあり、男孫も含めて後継者が欠ける場合には親甥子がその役を務めるという流れがある。それゆえに親甥子のシャオは孫と同列の立場としての様式であると考えられる。

(五)死者の配偶者を除き、いずれの輩分でも男性とそこに嫁いだ女性は同程度に複雑なシャオを身に付けており、基本的に女性は嫁ぎ相手の立場に準ずる。その特徴は下位親戚に顕著にみられ、実娘を含めて血縁党家から婚出した女性は、党家の一員とは見做されずに、同輩や他の親戚と同じ簡素な孝を身に付ける。これらの女性のシャオには、女性が嫁に行くまでは父親に従い、嫁に行ったら夫に従い、夫が死んだら息子に従う「三従 [sān cóng]」⁽¹²⁾という儒教の論理の強い影響が窺える。また息子や孫を含む男性のシャオは婚姻の有無が影響しないのに対し、未婚の娘や孫娘であってもそのシャオはa飾り付の孝帽ではなく、同世代である息子・孫の配偶者よりも軽いものとなる。これは成人した男性は党家の成員として見做されるのに対し、女性は婚姻と息子の生育を経て、初めて成員と見做されるためと考えられる。

(2) 参与する儀礼とシャオの着用期間

表1に示したように、軽重の差はあれども、葬礼に関与する全員がシャオを着用する。ただし、表4のように着用のタイミングと脱衣のタイミングは立場によって異なる。

① シャオの着用

家族と党家、喪主は死亡直後から葬礼の準備や運営に携わるが、シャオを着用するのは、死亡翌日の午後に行われる「成孝」の儀礼においてである。シャオを着用した状態で「請亡」という儀式に参加する。これは家族と党家全員が、陰陽先生と礼儀先生の指示で死者の身体から離脱した靈魂と党家の祖先の霊を村境から喪家に迎え入れるための儀式である。陰陽先生と礼儀先生は、その他の葬礼の儀式では宗教的な服装を着用するが、「請亡」と靈魂を送り出す「送亡」のみ白綿布を腰帶として巻く。また死後二日目の弔問式から参加する平等親戚・下位親戚と莊員は、遺体を安置した靈堂の前で拝跪礼を済ませた後、喪主からシャオを受け取って着用する。このように成孝以降の葬礼に参与する儀礼でシャオを着用するのが基本である。ただし、上位親戚の骨主だけは弔問に訪れた時ではなく、驗孝の儀礼を経て、孝を着用する。

② シャオの脱衣

次に、シャオの脱衣のタイミングをみていく。上位・平等親戚は埋葬時または「全三」(初墓参り)に、下位親戚や党家の人々は「全三」に、後継者は死後の百日目の墓参りの際に、他の血縁者の子孫は百日目の墓参りや五七(死後の三十五日)の祭祀の際に、それぞれ墳前でシャオを外して焼却することが一般的である。着用期間が最も短い莊員は、弔問式から帰宅する際に靈前でシャオを外して焼却する。その後も遺体を埋葬するために参加するが、この際には孝を身に

表4 葬礼関与者のシャオの着用期間

		成孝 (喪服の 着用)	請亡 (祖霊の 招請)	弔問 (追悼の 祭祀)	驗孝 (遺体の 検分)	送亡 (亡霊の 送還)	埋葬 (遺体の 埋葬)	全三 (初墓参 り)	五七 (死後 三十五日)	百日 (死後百 日目)
家族	父母(舅姑)									
	配偶者(夫/死者は妻)									
	配偶者(妻/死者は夫)									
	後継者とその妻									
	長孫以外の孫とその妻									
	曾孫とその妻									
党家	未婚の娘・孫娘									
	兄弟とその妻									
	後継者としての親甥 子とその妻									
	親甥子とその妻									
	一族の孫とその妻									
親戚	結盟党家の男女									
	上位親戚(骨主)の男女			×						
	平等親戚の男女									
莊員	下位親戚の男女									
	男女の喪主									
	喪主以外の莊員						×			
記号の意味		灰色：喪服の着用期間 縦線：事例によって着用の有無が異なる期間 ×：喪服を着用せずに儀礼に参加								

付けることはない。つまり、基本的には墓碑を建立する百日までの間に参加する死後祭祀ではシャオを着用し、祭祀に参加しない莊員は弔問式のみ着用するのである。シャオは霊堂や墳墓など死者の前で焼却することとなっている。シャオの焼却は、死者や祖先の靈魂との接触を終えること、喪が明けることを意味する。また葬礼の途中や弔問後の帰宅時、喪家で着用したシャオは絶対に自宅に持ち込んではいけないという禁忌がある。喪家以外の場所や家に持ち込むと、その場所の風水や運を害するとされるためである。

③ 小括

以上、シャオの着用期間からは次のような傾向が指摘できる。

- (一) シャオの様式には長輩・同輩・晩輩という輩分が最も強い影響を及ぼしているが、着用期間には家族・党家・親戚・莊員といった所属の影響がより強くみられる。家族や党家といった所属によって葬礼に関与する儀礼や期間が異なるためであり、死者と接する期間が長ければシャオの着用期間も長くなるのが基本である。
- (二) シャオの着用期間には、弔問式のみ、成孝から全三、その後の百日までの祭祀、という三段階がある。祭祀に関与しない莊員は、弔問式という限られた儀礼での

み着用する。莊員はその後遺体の納棺から墳地での埋葬、と祭祀用の墳墓とする整墓段階に立ち会うが、これはあくまで労働力の供出であり、死者を埋葬した墳墓での祭祀に参加する立場ではない。家族・党家・親戚には、後継者としての親甥子を含む子孫か否かで、シャオの着用期間が分かれる。子孫を除く家族・党家・親戚、葬礼を統括する喪主のシャオの着用期間は、最初の墓参りである全三までである。つまり族譜への記名、祖墳への埋葬を確認するまでが一区切りとされる。子孫は埋葬後も百日まで、シャオを着用しての祭祀が求められる。シャオの着用期間から、祭祀を担わない莊員、族譜への記名・祖墳への埋葬までを担う子孫を除く血縁・姻戚関係者、墓碑の建立までを担う子孫という三者の立場が窺える。

(三) シャオの様式にみられた特別な位置づけは、親甥子が息子の代理を務めた場合を除き、着用期間にはみられない。党家は族譜や祖墳への新たな死者の受容と承認までが、葬礼での役割とされるためである。一方で、子孫のうち長孫を除く孫、曾孫、未婚の娘や孫娘、親戚のうち上位親戚と平等親戚、といった子孫や親戚の中でもやや縁遠い関係の人はシャオの着用期間を切り上げることがある。シャオの様式と同様に、後継者・それ以外の子孫と下位親戚・それ以外の親戚の間には、厳密さに若干の差がみられる。

(四) シャオの着用期間では、骨主が特別な立ち位置として注目される。家族と党家は成孝をの時にシャオを着用し、それ以外の関係者は弔問式で拝跪礼をした後にすぐシャオを着用するが、骨主だけは驗孝を経てシャオを着用する。骨主がシャオを着用することは、族譜への記名と祖墳への埋葬という党家による葬礼を承認するという立場にあることによるといえる。

(3) シャオの意味と死者との関係性

シャオの様式や着用期間には、このように輩分や、家族・党家などの所属といった死者との関係性によって、複雑な決まりがみられる。こうしたシャオの実態からは、これには死者との関係性による位置づけが読み取れる。ここでは死者との関係性をあらためて整理したうえで、シャオが持つ意味を検討する。

① 死者との関係性

葬礼の関与者のシャオの様式と着用期間は、輩分（世帯順位）と所属（社会関係）という二つの基準によって分別される。

輩分では、死者の上か下かといった世代順位の位置付けによって、長輩、同輩、晩輩の三つに区分される。そのうち長輩には社会関係の所属を超えて共通するシャオの様式が見られる。さらに家族・党家といった晩輩の中で、家族には子、孫、曾孫といった世代の順位で、党家には甥世代と孫世代といった世代の順位によって、シャオに差異を設けられている。家族と党家における世代による区分には、長幼の序という儒教の道德観が顕著に反映されている。

一方、同輩と晩輩のシャオの様式と着用期間には、所属という社会関係が重要

な役割を果たす。特に晩輩は死者との所属の異同により、シャオの様式と着用期間が大きく異なる。所属としては、A家族としての子孫、B家族を除く党家及び親戚と喪主、C喪主を除く莊員という三つに大きく区分できる。こうした区分の中には死者に対する立場によって、さらに次のように細分化される。

A家族としての子孫のシャオは、i 息子の役を担う養子や親甥子を含めた息子と長孫という後継者、ii それ以外の子孫、iii 未婚の女性子孫に分別される。i 後継者は死者の財産の相続者かつ祭祀の主な担い手である。ii 子孫は死者から血のつながりがあり、死者を祖先とする祭祀の担い手である。iii 未婚の女性子孫は将来的な所属が不明瞭なため、その立場が確定されていない。

B家族を除く党家及び親戚と喪主は、死者の帰属を判別する立場にある。党家は死者に一族の祖先の資格を与える。骨主は死者の生前における生命福祉の状況を検分し、権利を保護し、死後の身分判定に責任を有す。喪主は党家と骨主の間を取り持つ役割を担う。つまり、骨主の検分に立ち会う党家と親戚と喪主は、各々の立場から、死者が族譜に記され祖墳への埋葬、つまり党家の先祖となり得るかどうかという所属先を判断・決定する立場にある。

C莊員は以上の血縁・姻戚関係から外れた地域関係の立場にあるものの、シャオの様式に関しては同輩の党家や親戚らの様式と大差がない。

一方、こうした輩分や所属という基準から大きく外れているのは、請亡と送亡など死者や一族の祖先の靈魂と接触する儀礼のみで白綿布を腰布とする宗教者である。

② シャオの意味

こうしたシャオの着用実態から読み取れるシャオの意味としては、死者への弔意、葬礼への賛意、死霊との接触という三つがあるといえよう。

【死者への弔意】シャオの基本的意味は、死者の死に対する哀悼の意を表すという点にある。しかし、その哀悼の意には i 親である死者への弔意、ii 祖先としての死者への弔意、iii 広範的な死者への弔意という三つが読み取れる。

死者の家族としての子孫は「重孝」を着用する。その装飾について、話者の李永祥⁽¹³⁾は「不看（見ない）、不聴（聞かない）、不説（言わない）」と説明している。子孫の視界と聴覚を遮ることで、外部との距離を置き、他人との会話を制限し、大切な親の死という悲しみに集中するという悲痛な哀悼の意を表している。そのため、子孫は葬礼の全般を喪主と党家に依頼し、儀礼的な儀式下の参加以外は、靈堂に安置された死者の遺体の両側に喪棒で身体を支えながら土下座する。

また、党家は死者を一族の祖先として認めた後、その葬礼の運営と死後祭祀を行う。党家の甥世代や孫世帯は葬礼運営と祭祀執行の担い手として、死者の子孫より簡易なシャオを着用するが、党家の同輩、親戚、莊員より重い孝を着用する。それは、党家の晩輩は、死者を祖先としての哀悼の意を表すためである。

さらに、未婚かつ後継者のいない男性が親の存命中に死亡した場合、その遺体

に後継者が着用すべきシャオを着せて棺材に納めてから埋葬する⁽¹⁴⁾というシャオの着用伝承から、シャオは「孝」の道德観を表現しているものであると言えよう。

こうした i 親である死者への弔意、ii 祖先としての死者への弔意は、儒教の「親と祖先に孝を尽くす」という「孝」道德観に基づいたものである。また、長輩、党家の同輩、親戚、莊員は死者に孝を尽くす義務がないから、白綿布のみで縫製したシャオを着用し、iii 死者への弔意を表すだけである。

【葬礼への賛意】 前述したように、シャオは「成孝」、「弔問」、「驗孝」という三つの儀礼によって着用される。党家は死者の死を受け、その死者が祖先であるかどうかを判断する。祖先であると、党家が死者家族の要請で喪家に集まり、「東家」という組織を形成し、葬礼の運営を担う。そして、「成孝」という儀式においてシャオを着用する。したがって、未成年や党家の成員と見なされない死者の葬礼では、党家の全員は関与せず、シャオを使用しない。また、「驗孝」という儀礼では、骨主を代表とする上位親戚が、死者の死因と治療経歴などを尋ね、遺体に対する検分を行う。死者の正当な死を判断した後、シャオを着用する。死者の身分判定、遺体検分などの特殊な立場を持たない家族や平等・下位新規と莊員は死者の死を受け入れた後、葬礼をはじめとする「成孝」の儀礼と最初に関わる「弔問」の礼儀でシャオを着用する。つまり、シャオの着用は、死者の身分と正当な死を確認し、その葬礼への賛意を表すということを象徴している。

【死霊と接触】 前述したように、シャオの着用と脱衣は、いわゆる着用期間が異なる。いずれも、着用者が死者の霊魂や祖先の霊魂が存在する空間に接触する際にシャオを着用し、接触が終わったらシャオを外すという流れがある。また、葬礼の途中や、弔問後の帰宅の際に喪家で着用したシャオを絶対に自宅に持ち込まないという禁忌伝承がみられる。さらに、宗教的職能者が「請亡」と「送亡」という儀礼において、腰には白綿布を巻くという実態がある。こうした点から、シャオの意味としては着用者が死霊と接触していることを象徴すると言える。

4. 結語

本稿では、青海省の漢民族の葬礼において着用されるシャオの形式・着用期間を確認し、シャオの様式を分類した。それぞれの様式構成、布地及び着用期間などの比較を通して、シャオの持つ意味を解釈すると、次の四点が指摘できる。

- (1) シャオの着用には、輩分と所属という二つの基準が設けられている。この基準によって長輩や親戚と莊員が着用の簡素なシャオと死者の妻、晩輩としての子孫と甥世帯が着用の「重孝」がある。「重孝」のうち、死者の息子という後継者とその配偶者のシャオが最も複雑で重い様式とされている。さらに、「三従」の儒教論理で死者の妻が夫のために最も重いシャオを着用している。しかし、「重孝」の様式はひとつではなく、直系の子孫、晩輩という世代観、

男女によってさらに細分化された様式が見られる。こうしたシャオの着用実態から、世代順位の長幼と所属関係の親疎という二つの基準が漢民族社会における人間関係の規範を形成しているといえる。

- (2) 後継者の有無は死者が祖先になる資格を得る条件の一つである。後継者は死者の財産を相続し、死者の死後祭祀の担い手の中心である。シャオの着用伝承には、後継者になる人が葬礼において、最も複雑な喪服を着用する。しかし、現在の葬礼には死者の後継者になる順位は、息子と長孫、長孫以外の男孫、養子と婿養子、親甥子である。つまり、後継者である息子が欠けた場合には、長孫か男孫が子の役を務め、男孫も欠ける場合には親甥子とその役を務めるという順位である。それゆえに親甥子のシャオは孫と同列の立場としての様式であると考えられる。
- (3) 実娘を含めて血縁党家から婚出した女性は、党家の一員とは見なされずに、同輩や他の親戚と同じ簡素な孝を身に付ける。これは成人した男性は党家の成員として見做されるのに対し、女性は婚姻と息子の生育を経て、初めて成員と見なされるためと考えられる。
- (4) シャオの着用実態から読み取れるシャオの意味としては、①死者への弔意、②葬礼への賛意、③死霊との接触という三つがあるといえよう。①はシャオの基本的意味であり、その哀悼の意には i 親である死者への弔意、ii 祖先としての死者への弔意、iii 広範的な死者への弔意という三つが読み取れる。また、シャオの着用は、死者の身分と正当の死を確認し、その葬礼への賛意を表している。そして、着用者が死者の霊魂や祖先の霊魂が存在する空間に接触する期間にシャオを着用する。つまり葬礼から墓での諸儀の期間が終わったら、シャオを外しており、シャオは、死霊とその着用者との接触を表現していると言える。

注

- (1) 雷鐸『古経服緯』百部叢書集成：原刻景印、嚴一萍選輯、藝文印書館（台北）、1965年。原文は「別尊卑、嚴内外、辨親疏、莫詳於服」である。日本語は筆者による訳。
- (2) たとえば、西晋（265年～316年）の基本法典、『泰始律』には「峻礼教之法、準五服以制罪（犯罪を防止するために礼教を盛んにし、五服の等級に準じて罪の軽重を定める）」という罪を五服の範囲での制裁原則として初めて定めた。
- (3) 霍福「南京竹子巷与青海汉族移民-民族学視野下的伝説故事的記憶和流变」『青海師範大学民族師範学院学報』第17卷第2期、2006年
- (4) 齐涛主編、石奕龍著『中国民俗通誌・喪葬誌』山東教育出版社、2005年。原文は「尽管在过去的典章中、汉族有统一规定的五服制度和喪服、但实际上中国各地的喪服也不尽相同、由于喪家的经济实力以及地方知识系统的解释、甚至时代不同等原因、中国各地的喪服样式也呈现出五花八门的特征」[185頁]である。日本語は筆者による訳。
- (5) 葬礼の実態と葬礼関与者の詳細については、拙稿「中国青海省の漢民族の葬礼と担い手—湟中県李家山鎮新添堡村の事例から—」（『東アジア文化研究』第6号、2021年2月）など

を参照されたい。

- (6) 人が死に臨む際、あるいは死亡後、家族は同じ地域（村）から全く血縁・婚姻関係がない他人に喪主の仕事を任せる。喪主は複数人で、男女の区別がある。男性喪主は、徳望が高く、村人から尊敬を集めている、葬儀経験の豊富な莊員が選ばれ、葬礼での最高の統括者として、家族の依頼により葬礼の運営といった全般を担う。男女の視点から、女性の死者に対して男性喪主は寿衣を着替えず、代わりに寿衣を着替えた村人の女性を女性喪主と尊称する。つまり、事例によって喪主は男性喪主と死者に着替えた女性喪主がある。男性喪主は葬礼では東家を管理、統率する上葬礼を進行させる。女性喪主は死者に寿衣を着替え、葬礼参加者が着用するシャオを縫い、葬礼の進行などの実務に関与しない。
- (7) 尺は古代中国の長さの単位である。青海省の漢民族がシャオを縫製の際、定規を使わず、縫製の人が親指と中指を広げ、その両端の距離で長さを測る。親指と中指を広げた両端の距離を「拃」[zhǎ]と呼び、約 5 寸 (15cm) である。1 尺は 10 寸 (約 33cm) で、2 拃に相当する。
- (8) 拙稿「中国青海省の漢民族の婚礼と葬礼-西寧市周辺の農村部の事例から-」(『東アジア文化研究』8 号、「東アジア文化研究」編集委員会、2023 年 2 月) で述べたように、青布衫は青綿布で作られた、高襟、スリット、装飾用ボタン（右寄り打合わせ）の特徴を備えた女性の衣服で、青布衫は結婚した女性が着用する礼服である。結婚の日に女性が実家から婚家まで移動する際に着用する。実家を出て婚家に到着するまでの間に魔を除ける意味がある。さらに、親密な死者の葬礼に着用する。
- (9) 曾孫の配偶者のシャオについては、筆者は調査で目にしたことがないため、聞き書き調査による。2019 年 9 月の調査における話者、景香蓮 (1941 年生、女性) は青海省西寧市湟中区李家山鎮河湾村に在住の村民、村人の葬礼に女性喪主の役をよく頼まれる人物である。
- (10) 党家の詳細は、拙稿「中国青海省の漢民族の葬礼にみる生前と死後の宗族-祖墳と族譜を中心」(『伝承文化研究』19 号、伝承文化学会、2023 年 3 月) を参照されたい。
- (11) 死亡後、上位親戚は弔問日に驗孝という儀礼を行う。上位親戚の男性が務める「骨主」が遺体を検分し、死者の家族に対して生前の扶養や疾患の治療などについて質問する儀礼である。具体的には、死者が家庭内暴力などの虐待行為を受けていたか否か、遺体に着る寿衣の枚数、棺材や墓石の状況を確認し、さらに豪華にするようにといった死装束と葬具についての要望を伝える。「驗孝」の儀式で、上位親戚は、後継者を主とする家族が死者に対して親孝行であったか否かを判断する。
- (12) 三従とは、女性が嫁に行くまでは父親に従い、嫁に行ったら夫に従い、夫が死んだら子どもに従うという教えることである。
- (13) 2019 年 9 月の調査における話者、李永祥 (1945 年生、男性) は青海省西寧市湟中区李家山鎮河湾村出身・在住の村民である。転出せず、現在まで継続して農業に携わってきた。葬礼などに詳しく、村落の葬礼で喪主の役を務めることが多い。
- (14) このような死については、拙稿「中国青海省の漢民族の葬礼にみる生前と死後の宗族-祖墳と族譜を中心」(『伝承文化研究』第 19 号、伝承文化学会、2023 年 3 月) を参照されたい。

参考文献

- 谷田孝之 (1970) 『中国古代喪服の基礎的研究』風間書房
 広池千九郎 (1983) 『東洋法制史研究』創文社
 丁凌華 (2000) 『中国喪服制度史』上海人民出版社
 石奕龍 (2005) 『中国民俗通志・喪葬志』山東教育出版社
 霍福 (2006) 「南京竹子巷与青海漢族移民-民族学視野下の伝説故事的記憶和流变」『青海師範大學民族師範學院學報』第 17 卷第 2 期